青年期の自己開示傾向と家族関係との関連性について

近藤聡美・高城絵里子（非会員）
（ルーテル学院大学総合人間学研究科）
キーワード：自己開示，家族関係，青年期

The relationship between self-disclosure and family ties in adolescents
Satomi KONDO, Eriko TAKAKI
(Japan Lutheran College Graduate School of Integrated Human Studies)
Key Words: self-disclosure, family relationship, adolescents

目 的

自己開示とは自己を他者に表す行為のことである。自己開示は精神的健康のしるしであり，精神的健康を示す特徴を多くあらわす人は，自分自身を他者に知ってもらう能力ももつことが示唆されている(Jourard, 1971/1974)。また，自己開示と家族関係を扱った研究において，養育者の情緒豊かで温かいなどの養育的な態度が，子どもの自己開示を促すことがわかっている(中野, 2006)。しかし，この結果は幼少期における養育者との関係についての調査であり，現在の家族関係と自己開示との関係についての研究は見当たらない。一方で，村木・高橋(2010)は，現在の家族全体の機能と精神的健康との関連を見出していることから，現在の家族関係と自己開示との間にも関連があるのではないかと考えられる。また，親への依存から脱却し，心理状態が不安定な青年期に，自己開示できる親密な関係をもつ事は大きな支えになる(榎本, 1997)ことから，青年期において，自己開示が精神面にプラスの効果を与える可能性について検討を行うことは重要である。本研究では，青年期における自己開示と現在の家族関係との関連性を探ることを目的とし，その研究成果を青年期への心理的援助に役立てることを目指している。また，非言語的手段である動的家族描画法を用いることにより，無意識的水準における家族関係と自己開示の関連性が明らかになることが想定されるため，併せて検討する。

方 法

A 大学において，2011 年 5 月から 11 月にかけて，学生を対象に無記名による質問紙調査および動的家族描画法（KFD）を実施した。分析には回答不備を除く 95 名を対象とし(男 40 名，女 55 名)，そのうちの 60 名の KFD を評価の対象とした(男 25 名，女 35 名)。調査用紙は，基本的属性である年齢，性別および調査内容に関する項目として居住形態，家族構成，自己開示の相手についてたずねる質問項目をのせたフェイスシートのほか，①自己開示尺度 ②家族機能測定尺度 ③幼児期の幸福尺度 ④KFD の教示によって構成した。

結 果

(1) 過去の家族関係と自己開示

過去の家族関係と自己開示の間には先行研究に示されるとおりの有意な結果が得られた。また過去の家族関係をよいと感じている者は，よいと感じていない者よりも現在の家族関係がよいことがわかった。

(2) 現在の家族関係と自己開示

現在の家族関係と自己開示の間との関係については，家族関係をよいと感じている者は，よいと感じていない者よりも気持ちや考え，自己に関する情報などを隠蔽しない傾向にあることはうかがえたものの，全体として有意な差はみられなかった。一方で，開示相手に家族をあげた者は他者をあげた者よりも家族の結びつきが強いことがわかった。また無意識的水準における家族関係と自己開示の関連について KFD による検討を行うため，描画の印象評価尺度を作成し評価を行った。その結果，情緒的で親密な印象の描画と評価された被験者群はそうでないと評価された被験者群と比較して，自己開示度も高いことがわかった。そして，このことは質問紙による調査結果を支持するものであった。

考 察

幼少期の家族関係がよい者は自己開示度が高いという先行研究を支持する結果は得られたものの，現在の家族関係と自己開示の関連において，全体としての結果に有意差がみられなかった。その要因について，①家族機能測定尺度の構造的特徴により，家族関係と自己開示の相関が表面化されなかった②自己開示と精神的健康との関連は正の相関ではない③データ数不足の可能性が考えられる。

KFD 印象評価が質問紙調査の結果を支持したことについては，無意識的水準においても家族関係と自己開示との間に関連が示唆されたものと考えられる。

以上のことから，自己開示と精神的健康との関係性の再考，データ数を増やす，あるいは動的家族描画法において投影法本来の分析を行っていないことをふまえ，個々の描画に焦点を当てるなど両者の関連についてさらなる検討を行っていく必要があるといえる。